

Ⅱ 新刊紹介 Ⅱ

工藤元男著

『占いと中国古代の社会』

—— 発掘された古文獻が語る 』

東方書店 二〇一一年二月二〇日

本書はかなり難解な本である。と言うと、著者からお叱りを受けるかも知れないが、読後にそう感じられる方も多いのではないだろうか。その主な要因は恐らく、本書が一般書であること、そして本書で扱われている内容がこれまでの文化史や社会史の分野であまり扱われておらず、些か専門的であることの二点にあるように思われる。この点は後で触れるとして、まず本書の構成と内容を簡単に紹介しよう。

本書はプロローグで始まり、凡例を挟んで本論として全八章が展開され、エピローグで総括し、最後にあとがき・図引用一覧という形で構成される。本論である全八章を通じて核となっているのが「日書」と「卜筮祭禱簡」という二種類の簡牘資料である。「日書」は戦国・秦漢時代の墓葬から出土し、時日の吉凶を判断する占いを中心に多種多様な占いを抄録した占卜書であり、「卜筮祭禱簡」は戦国楚墓から出土し、

戦国楚の貴族が毎年年度初めに定期的に、あるいは罹病時などの非定期的に巫祝を屋敷に招いて向こう一年間の災禍の有無や原因・対処法などを貞問させた恒例行事の記録である。

プロローグで本書の背景や問題意識を述べた後、第一章「長安東市の日者」ではまず、「日書」に関連するとされる占卜者「日者」の宇宙観や日常生活を伝世文獻と簡帛資料の両面から描き出す。続く第二章「日書」の発見」では、これまでに出土している十六件の「日書」について時代順に出土状況や内容を丁寧に紹介し、「日書」の資料的性格についての問題点を整理する。ここまですべて「日書」とはどのような資料なのかという入門篇であり、第三章以降を読み進めてゆくための基礎となる。

第三章から第五章までは、「日書」に抄録される占卜を個別に検討しながら、占卜と古代社会の繋がりを具体的に示してゆく「日書」研究の応用編である。まず第三章「国家と占卜」で秦漢帝国を中心に国家レベルで行われた占卜の在り方を概観する。その後、第四章「官吏の出張と占卜」では統一国家の基層たる地方官吏に目を転じ、その公務と占卜の関係について尹湾漢墓簡牘を例に論を進めて出張と占卜の密接な関わりを裏付ける。それを承けて第五章「行旅と占卜」では行旅の安全を掌る行神や送行の祭りである祖道、「日書」の関連諸篇について前著『睡虎地秦簡よりみた秦代の国家と社会』（創文社、一九九八年二月）の議論を踏まえて再検討す

る。

第六・七章は「日書」との継承関係が想定される「卜筮祭禱簡」に視野を拡げた議論である。第六章「卜筮祭禱簡」と貞人・貞卜」でまず包山楚簡を例に「卜筮祭禱簡」の基本的な構成と内容を示した後、第七章「卜筮祭禱簡」から「日書」へ」で疾病に関する貞問と「日書」の疾病関係の占卜との共通点などから「卜筮祭禱簡」と「日書」の継承関係を論じる。

最後の第八章「法と習俗」では再び「日書」に戻り、秦漢時代における国家統治と社会習俗の関係を田律（土地耕作・農業生産などに関する法規）と土功（土木作業）に関連する占卜から検討する。そしてエピソードでこれまでの検討をまとめ、著者が導き出した「日者」の定義、「日書」の資料的性格や定義などが示されて完結する。

以上の内容は各章の繋がりや論の展開・論旨も明瞭であり、かつ平易な文章で綴られているので、本書は決して読み辛いものではない。ただし一般の読者が具体的に挙げられた個々の占辞などを理解するのは些か骨が折れるのではないだろうか。と言うのも、そもそも本書が中核に据える「日書」という資料は、一九七五～七六年に睡虎地十一号秦墓で出土した「日書」によって初めてその存在が確認されたが、同出の秦律など法制資料より図版・釈文の公刊が遅れ、当初はほとんど注目もされなかった。このような状況にあって著者は「日

書」と法制資料を同じ土俵で分析するために社会史的視座を採り入れ、「日書」を歴史学の史料として初めて真正面から取り扱い、前著で「法と習俗」という基軸を確立した。

その後、戦国時代や漢代の「日書」、さらに「卜筮祭禱簡」も発見され、研究も積み重ねられてきたため、中国古代の宗教信仰・社会民俗を研究する上でのこれらの資料の重要性は今日すでに多くの研究者に認知されている。しかしながら、そうした「日書」研究の多くは個々の占法原理の分析や各「日書」の系統関係を論じるものであり、一方「卜筮祭禱簡」では個々の祭祀対象や祭祀儀礼の検討が中心となっており、著者のようにこれらの宗教民俗資料を従来の中国史の枠組みの中に組み込み、新たな中国古代史を描き出そうとする研究は日本は言うまでもなく、中国や韓国などを含めても皆無に近い。この点において、睡虎地以降に出土した「日書」・「卜筮祭禱簡」による新たな知見を併せて、中国古代の占卜と社会の密接不可分な関係を前著より発展的に論じた本書は、著者の現時点における研究成果の集大成と言えよう。それが偶々一般書の体裁をとっているに過ぎない。言うなれば、本書は「日書」や「卜筮祭禱簡」という馴染みの薄い資料の入門書・概説書であると同時に、それらを活用した最先端の古代史の研究書なのである。

研究分野の細分化や蛸壺化が危惧されて久しい。本書で論じられる占卜と国家や法律との関係は、占卜などの一見怪し

げな数術の世界が社会から独立して存在するものではなく、あくまでもその一部であることを教えてくれる。個々の資料や対象を当時の社会の中に位置づけて考える良い契機になると思われるので、時代や分野を限らず中国史研究に携わる多くの人に本書の一読をお薦めしたい。一般書らしく随所にレイアウトされた写真や図表も本書の専門的な内容を理解する一助となる。最後に、本書は一般書であるが、すでに海老根量介・池澤優阿氏による対専門書的な書評があるので『中国出土資料研究』第一六号、二〇一二年三月、『東方』三七六号、二〇一二年六月)、本書をより深く理解するためはこちらも是非参照されたい。

(森 和・成城大学民俗学研究所研究員)

陳高華・張帆・劉曉・党宝海「点校」

『元典章』(全四冊)

中華書局・天津古籍出版社 二〇一一年三月刊

『元典章』(『大元聖政国朝典章』)とは、元代初期から中期までの詔令・判例集であり、法制史のみならず、その判例に記録される多様かつ生々しい当時の日常生活の様相や政治・制度の実情から、元代の政治・経済・社会・軍事・宗教活動・交通・各種慣習などについても、きわめて高い史料価値を有している。ただし、その収録する詔令・判例には、カアンの聖旨から州県レベルの文書が複雑に引用・転載されており、またその文体も、文語から吏牘体、口語まじりの文体から、モンゴル語の語彙・文法の強い影響を受けた「蒙文直訳体」まで、様々に混じり合っている。このため、その解読の難度が高いのみならず、校訂作業も困難なことで知られている。『元典章』の校訂については、主に二十世紀後半に入ってから、個人研究者や研究グループにより、数多く行われてきており、それがすでにひとつの研究史を形成するまでになっている。^①これは現在も継続中であり、例えば、京都大学で組織された「元代の法制」研究班が、近年連続してその校定と